

D-31 光線の感情効果に関する実験的研究 — 入射位置の違いによる検討 —
阪大エ ○大月容子 奈良女大家政 梁瀬慶子
ノートルダム女大生活文化 花岡利昌

目的 本研究は光線による心理的効果を室内設計に有効に応用するための基礎資料を得る目的で、感覚的にとらえられ、経験的に利用されている光線の基本概念を抽出し、さらにそれを尺度化することを試みたものである。本報は前報(431回総会)で検討した光線の方向・量・強さの3要因に、更に光線の入射位置を加えての検討を行ない、空間内での光線受照位置による感情効果分析も併せ行った。

方法 実験装置は前報のものを用い、前報では入射口位置を正面中央のみについて行ったが、本実験は入射口位置を正面中央・左側面中央・上面中央の三方向と変化させた。実験条件・調査方法(SD法)は前報に準じた。分析手法は、主成分分析による抽出因子をもとに因子得点から各光線の因子的特徴を明らかにし、さらに数量化分析I類によって光線の物理的条件と感情効果との客観的関係を求めるという方法をとった。

結果 光線のイメージとして前報と同様、活動性・神秘性・心地良さの3因子が抽出され、中でも活動性因子の影響が最も強く、心地良さの因子は他の2因子からの独立性が高かった。光線の因子的特徴として、活動性に高むのは観察者の方へ向かうようにする光線や上向きの光線であり、神秘性は遠ざかる光線や弱い光線で高まることが明らかとなった。さらに、数量化分析の結果、入射口位置は神秘性には、受照壁面とその壁面部位の奥行きは活動性に影響が強く、また光量は活動性に、垂直方向角度は心地良さに影響し、強さは各因子に影響していることが明らかとなった。